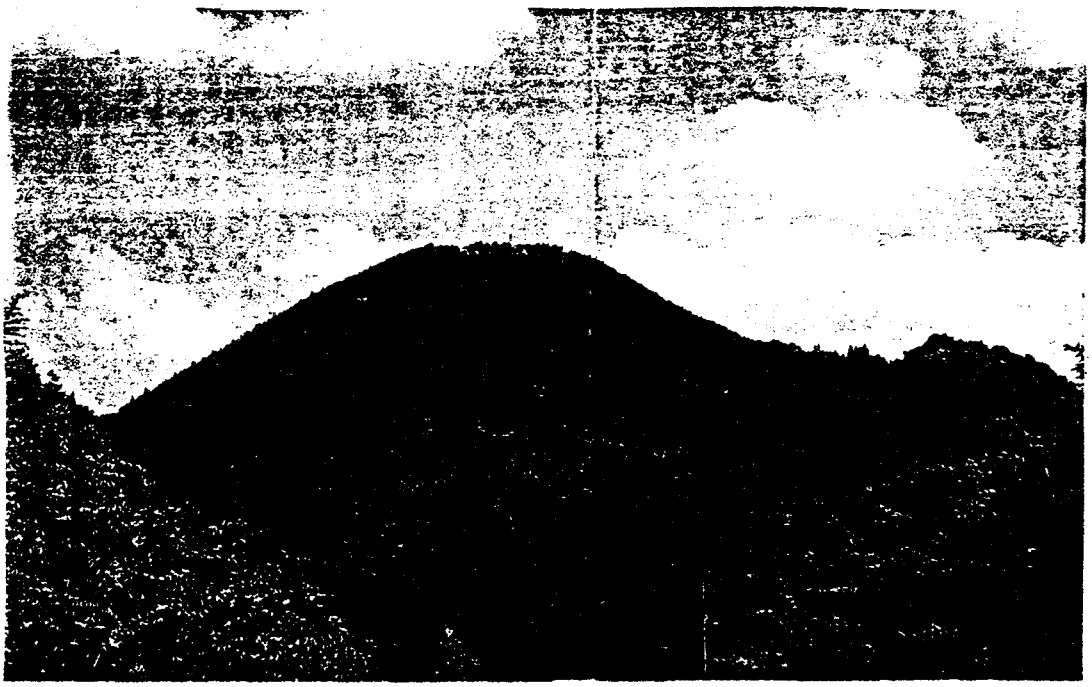
１１月例会

バスツアー神石郡豊松村史跡めぐり

～戦国山城と南朝の史蹟を訪ねて～

講師　当会城郭研究部会長　出内博都



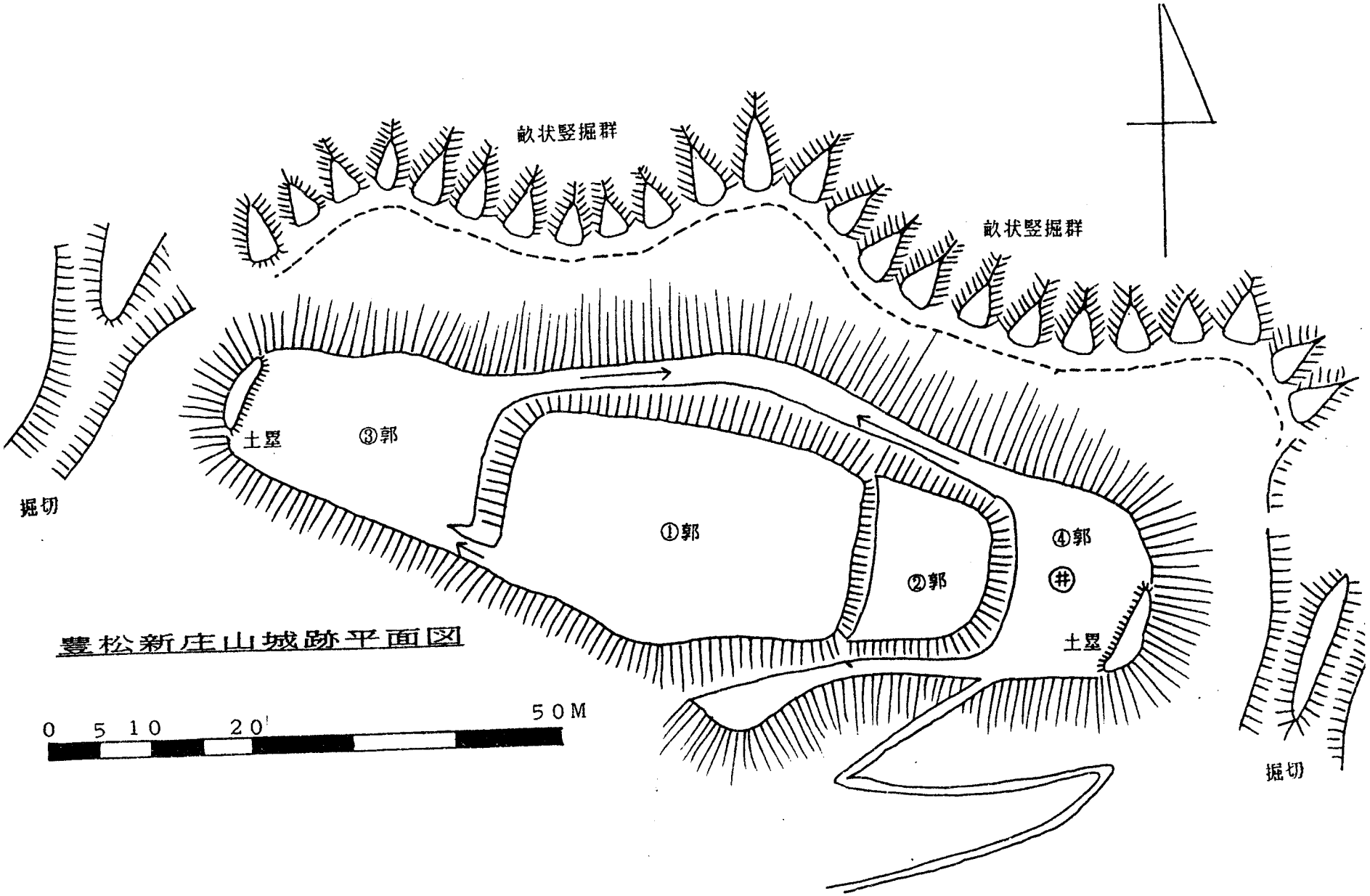
米見山（よなみやま）　663m　「豊松富士」と呼ばれ村のシンボル

平成二年（１９９０）十一月四日（日曜日）実施

備陽史探訪の会

〒７２０福山市多治米町５－１９－８

☎（０８４９）５３－６１５７



豊松新庄山城跡平面図

豊松村　面積五二・五六平方キロ

神石郡の東部中央に位置し、東は岡山県川上郡に接し、北・西・南の三方は油木町に囲まれる。北は成羽川、西は天田川、南は仙養原が油木町との境界をなし、自然的条件からみると備中に向かって開けている。こうした地形上の特性は、文化・歴史・習俗などの面でも吉備文化に連なる備中系の色彩が強く残る。

村内を流れる河川はすべて北流し成羽川に合する。高原面をこれらの川が浸食してできた氾濫原や段丘の谷が開墾されて水田となり、高原面の畑とともに隅々まで開発され、多くの小集落が散在する。村内を三線の県道が東西・南北に走り、村政の中心地下豊松四日市は、県道布賀―油木線、芳井―油木線の分岐点ともなっている。農業・畜産を中心とした純農村で、葉煙草・蒟蒻・和牛の生産が盛んである。なお村内各地に伝わる供養田植(牛供養のために催される大規模な田植)は県指定無形民俗文化財。

明治二二年(一八八九)の町村制施行にも現村域内は旧来の五ヵ村(上豊松・下豊松・中平・有木・笹尾)は合併することなく存続したが、上豊松村を除く四ヵ村は四ヵ村組合を結成、同三〇年四ヵ村組合と上豊松村が合併して豊松村が成立、役場が中平に置かれた。同四二年役場は下豊松中筋谷(四日市)に移転した。

豊松

現豊松村域および現油木町の一部を含めた地域をさした広域地名。史料的には享禄五年(一五三二)の油木吉備津神社棟札(油木八幡神社蔵)に「備後国神石郡豊松油木両村一宮」とみえるのが早い例だが、開化天皇六世の孫息長日子王が住したという伝えがあり、その子孫と称する翁氏が代々下豊松鶴岡八幡宮の社務をつかさどった。また崇神天皇五四年、皇女豊鋤入姫命が神鏡を奉じて今伊勢宮(現福山市の今伊勢神社)から吉備国へ越す途中、この地に至りしばらく神鏡をとどめた。去るにあたり住民が名残を惜しむので、神鏡をとどめた松に姫の名の豊の一字をつけて豊松と命名したという地名説話がある。このような伝承上の古さとともに、開発の古さをうかがわせる多くの考古遺跡が存在する。

中世には有木辺りが日野中納言家領であったと伝え(備中府志)、在地生え抜きの有木氏(備後一宮吉備津宮の神官でもあった)、内藤氏および元弘(一三三一―三四)頃近江より入部したと伝える平川氏などが領知した。戦国期に大内・毛利対尼子の勢力争いの接触点となった当地は一時的にはその支配者がめまぐるしく変わったと推測されるが、天文年間(一五三二―五五)五月晦日付で、毛利元就が福永(現神石町)の城主と思える岡七郎兵衛尉に宛てた書状(京都大学蔵「古文書纂」所収)に「豊松之儀於相調者、御方御同名中一人之跡可進之置条、聊不可有相違候」とあり、おそらく尼子氏の進出に対して岡氏がよく毛利氏に味方したことに対する見返りとして、当地が岡氏に宛行われており、一時的にしろ神石郡西部の岡氏が当地にまで勢力を伸ばしていたことが知られる。やがて同じく毛利氏の勢力を背景に小畠(現三和町)に本拠をもつ馬屋原氏が力を伸張し、永禄一一年(一五六八)二月七日付で、「豊松四ケ村四百四拾貫余地之事、全可有御知行候」という書状(「閥閲録」所収馬屋原三郎家文書)が毛利元就・輝元連署で馬屋原少輔五郎に与えられている。この豊松四ヵ村はどの地域に

あたるかはっきりしないが、有木氏（有木在住）・平川氏（笹尾在住）の存在からみて、のちの上豊松・下豊松のほか現油木町の一部と考えられる。

近世に入り豊松は豊松（上豊松・下豊松）・有木（東有木・西有木）・中平・笹尾などの諸村に分れていくが、例えば花済竹迫八幡神社（現油木町）の寛永一二年（一六三五）の棟札に「備後国豊松村有木之内花済村」とあるように、広域地名としても用いられている。

上豊松村　⑩豊松村上豊松

現豊松村の南端に位置し、東から南・西を六〇〇―七〇〇メートル級の山で囲まれる。これら山塊の谷々から流れ出る小河川が村の中央部天田で合流し、天田川となって北流する。開発の歴史は古く、縄文時代の堂面洞窟遺跡、父賀・野・八鳥の各古墳群がある。堂面洞窟遺跡は天田川の北岸にあり、帝釈峡遺跡群の一（比婆郡の―帝釈峡遺跡群）。半壊しているが洞内と洞外に堆積土があり、深さ約五メートルに達する。文化層は現在までに一五層が識別されており、早期から晩期に及ぶ遺物が検出されている。

近世の上豊松村は元禄一三年（一七〇〇）の備前検地によって高一千一二八石余と定められるが、これは元和五年（一六一九）の備後国知行帳にみえる豊松村（高五二九石余）に油木村（現油木町）の一部を合して、上下の豊松村となったものとされる。しかし高の増加は開発や新検地による打出、油木村の一部編入だけでは解釈のつかない面もあり、上豊松村として固定するまでには度々の境域変遷があったと思われる。福山藩水野氏断絶後は幕府領、嘉永六年（一八五三）福山藩領に復帰。

上豊松は中世を通じて当地方に勢力を張った内藤氏の本拠地で、居城および居館跡がある。内藤氏は河内守実豊の時、元弘の乱に際して宮方としていち早く挙兵した桜山城（跡地は現芦品郡新市町）の城主桜山慈俊に呼応して、神石郡の土豪を統合して各地を転戦している。こうした史実の反映として、後醍醐天皇潜幸伝説、敵をあざむくための偽山陵（米見山山頂にある）の伝承があり、また矢原谷にある宗道神社はこの時供奉してこの地で没した藤原宗道朝臣を祀ったものと伝え、伝承と現実の神社信仰が結び付いている。矢原谷は古代における矢作部の子孫が住む集落といい、矢原七戸が協同の祖霊信仰（矢原七剣神＝七雷神）の風習を伝える。

上豊松の各谷々には古い屋敷地を意味する「があち」（垣内）が多数あり、また的場・やり畠・犬の馬場などの地名もあって、これらの配置の状況から、内藤氏の居城・居館を中心とした中世土豪武士の村作りの跡をしのぶことができる。米見山西麓の寺谷には貞治三年（一三六四）知庵元周によって開かれたという臨済宗永源寺派松源院があり、上豊松・下豊松・中平の総講寺として今日に及んでいる。

高山路

上豊松有賀から同八鳥を経て船越峠を越え、油木（現油木町）の高水池・市場下に至る道で、豊松―油木間の一幹線であった。市場下の歌の御堂の前に牛馬安全を祈る道標碑があり、「右ふくやま路　左かうやま路」と記される。八鳥―高水池間は大正末年頃に新道（現県道油木―芳井線）が開かれたためしだいに寂れ、今はほとんど利用されない。かつての船越峠は現在一本木峠と称され、船越峠の名は新道の峠をさすようになった。

かつての高山路の最高所（高水池地内）に二メートル余の宝篋印塔があり、後醍醐天皇の偽陵と伝える。また沿道に「巨人の足跡」と称する一反ほどの一枚の畠があり、足跡の形に耕されていた。この足跡は右足の跡で、左足跡は備中某所にあると伝える。今は荒地となって面影はない。

新庄山城跡・土居城跡 図豊松村上豊松

新庄山城跡は上豊松有賀の県道布賀―油木線の北側にある新庄山（五五〇メートル）にあり、中世を通じ当地方に勢力を有した内藤氏の本城。新庄山からは上豊松の谷々を見下ろすことができ、南と東は天田川に囲まれ、川を隔てて東北方の米見山と向い合う要害の地である。城は丘陵頂部を利用して築造されており、最高所に長さ約三〇メートルの本丸を設け、その両側に一―二段の郭を直線的に並べて両端は土塁と空堀で区切っている。とくに攻撃を受けやすい北側の山頂に近い斜面一帯には、土を削り取って作った小土塁三〇余個が並べられている。

「西備名区」によれば正慶二年（一三三二）内藤河内実豊が亀石（現三和町）より当地に移って築城したのに始まるといい、戦国期まで内藤氏が居城したと記す。また明応年中（一四九二―一五〇一）には内藤左馬亮景数が足利義満から甲奴郡の地頭職を宛行われたとも記し、天文年中（一五三二―五五）内藤新左衛門の時没落したという。実豊は元弘の乱に際して宮方として挙兵した桜山慈俊に呼応、慈俊の嫡子平太郎盛重麾下の武将として各地に活躍、武家方の将小早川氏の本拠安芸の高山城（跡地は現豊田郡本郷町）を攻落してこれを守ったが、のちに新高山城で戦死したという。戦国末期内藤氏没落後は上村壱岐守員貞が居城、上村氏は「西備名区」に「元大内家之臣、毛利侯に従ひ、内藤退去之後移るとそ」とある。また上村豊後守・片山八郎などの名も城主として伝えられる（西備名区）。片山八郎は宗兼（現油木町）の大床山城主でもあったといわれる。

土居城跡は新庄山の東北方、天田川を挟んで数百メートルの丘陵上にあり、天田川の蛇行によって天然の要害をなし、川谷に開けた天田の沃野を一望することができる。「神石郡誌」は城主不明とするが、明らかに土居（居館）形式であり、内藤氏の居館跡である可能性が強い。二段の空堀をめぐらし、土塁の跡と思われる土盛りも残る。また城跡北側の田は堀尻、南側一帯の田は土居田とよばれる。なお矢原谷の土居家屋敷も中世の居館形式を継承しており、位置関係からみて内藤氏の居館をこちらにあてる見方もある。

下豊松村 図豊松村下豊松

上豊松村の北東に位置し、中世以来豊松の中心地。孔山古墳を中心とする数基の古墳群があり、また当地方の総氏神であったと伝える鶴岡八幡宮が鎮座、その鳥居前に中世から市が開かれていたと伝え、四日市の地名が残る。近世の下豊松村は元和五年（一六一九）の備後国知行帳にみえる豊松村が上下に分離して成立（↓上豊松村）、元禄一三年（一七〇〇）の備前検地で高七一七石余となった。福山藩水野氏断絶後は幕府領、享保二年（一七一七）以降豊前国中津藩領となる。

四日市集落の西背後に米見山（六六三メートル）がそびえる。その昔息長日子王が当地に来り国見をしたので国見山と称していたが、のちにその子孫息長米見を葬ったので米見山とよぶようになったといい、平安時代末、山頂に鎌倉の鶴岡八幡宮を勧請して祀ったと伝える。また山岳信仰の霊場でもあり、江戸初期、息長氏の末裔と称する翁宗信（仙養坊・善養坊）がまず修行したのは当山であったと伝える。現在も八大竜王を祀った跡が残り、東南麓にはみそぎ場としての塩川大明神が祀られている。

なお当地方には元弘の乱に際しての後醍醐天皇潜幸伝説があるが、備中方面の敵をあざむくために天皇死没を装い、その偽陵を米見山山頂に作ったという伝承があり、堀をめぐらした五輪塔の一部が現存する。笠置（現京都府相楽郡笠置町）などとの修験者の交流のなかから、桜山慈俊の挙兵と結び付けた潜幸伝説が生れたものであろう。

孖山古墳を含めた一帯は現在孖山公園となっているが、園内に民俗資料を収める蔵があり、祭祀・信仰関係用具を中心に一千余点収蔵される。これらは備中・備後における民間信仰を知るうえで貴重とされ、国の重要民俗資料に指定されている。

鶴岡八幡神社 ㊀豊松村下豊松　中筋谷

孖山古墳のある孖山公園に接して鎮座。所在地を和部山といい、古くからの霊地であったと伝える。社叢は県指定天然記念物。祭神は神功皇后以下四〇柱に及ぶ。旧村社。社伝は、孖山古墳を息長日子王の墓として尊崇し、これを天神とあがめていたが、のちに王の子孫を併せ祀り高霊神と称し氏神として信仰したのに始まるといい、平安後期に米見山にあった鶴岡八幡宮を当地に移し、在来の天神崇拝と併せて氏神としての八幡社を創建したと伝える。元永二年（一一一九）以降、当社は豊松庄・日野庄・日谷庄・篠尾庄、只原庄・油木庄・花済庄（現油木町）、川手庄（現岡山県後月郡芳井町）の八ヵ庄の総氏神となり、各地の社家が神職共同体としての注連幣下を組織し、注連頭を当社の神職翁氏が勤めていた。しかし寛正年中（一四六〇―六八）相論があり、豊松庄だけの氏神となったと伝える。

当地方に伝わる八ヶ社神代神楽神殿行事（県指定無形民俗文化財）は、前述の八ヵ庄の神職が共同で神事を行ったことから発したと伝えられる。古くから伝わる吉備神楽に出雲系の神能および備中川上郡（現岡山県）の国学者西林国橋の作った神代神楽の一部を取入れ、さらに天保一〇年（一八三九）に当社宮司が八ヵ庄注連頭として裁許を受け、「宮中七種舞」などを取入れて完成したものという。また当社の例祭時の神事（渡り拍子・宮座・御湯立神事・やぶさめ神事）も県指定無形民俗文化財。宮座については新庄山城主内藤氏の末裔内藤忠光が永正二年（一五〇五）に著した宮座覚書（内藤恭昌氏蔵）が伝わって中世後期にさかのぼるものであることが知られ、江戸時代の状況については元禄一三年（一七〇〇）の八ヶ庄古来覚書（同氏蔵）に詳細が記される。

当社には柿本人麿が石見国へ下る途中立寄って、「古への人の植えけむ杉が枝に霰たなびく春はきぬらむ」と詠んだという伝承にちなみ人麿神社が境内に祀られる。社叢の中に樹齢八〇〇年を超える大杉があり、人麿の歌杉と伝え、毎年九月八日に人麿祭が行われる。なお付近に神宮寺という地名があり、かつて神宮寺が存在したこと

がうかがわれる。社伝によれば青竜山別当寺と称したという。社宝に神石郡名の起源となったといわれる亀甲石や孝明天皇が奉納した衣がある。

豊松山城跡 ⑨豊松村下豊松

米見山東麓の丘陵上にあり、四日市集落を見下ろす要衝の地を占める。土居形式の居館で、「西備名区」は内藤左馬進以下八人の名を城主として伝える。いずれも永禄―天正(一五五八―九二)頃の人で、上豊松新庄山城を本拠とする内藤氏の一族である。麓に城主の墓と伝える五輪塔と「女中みさき」と称する茶樹が一株ある。茶樹の所在地は、当城落城の際、逃遅れた女中が非業の死をとげた所といい、茶樹を切るとかさ(ふきでもの)ができると言伝える。麓に城主の子孫が居住し五輪塔を祀っている。

別所城跡 ⑨豊松村下豊松

川東にある独立小丘陵上にあり、恩ヶ丸ともよばれる。所在地は川東・中筋谷・追谷などの沃野と集落を押える要衝である。丘陵頂上を二段に削平し、空堀をめぐらした典型的な土居形式の城で、「西備名区」は城主として内藤左馬允・新左衛門尉実盛の名を伝える。上豊松新庄山城を本拠とする内藤氏の一族であろう。内藤氏没落後は毛利氏の配下として岡氏が川東を領知、当城に拠ったという(西備名区)。頂上に内藤氏一族の墓と伝える五輪塔十数基があって荒神社が祀られている。なお城跡付近に当城にかかわりがあったとみられる者の屋敷跡があり、実光・友国などの名を伝える。

中平村 ⑨豊松村中平

下豊松村の北に位置し、東・北を有木村、西を笹尾村に囲まれる小村。仁吾川と平川街道が南北に走る。元和五年(一六一九)の備後国知行帳では一一六石余、元禄一三年(一七〇〇)の備前検地で二七〇石余に増加。福山藩水野氏断絶後幕府領、嘉永六年(一八五三)福山藩領に復帰。

城山とよばれる山があり、麓に土居と称する屋敷跡があって近年永楽銭など古銭が多く出土したという。「神石郡誌」が有木にありと記す玉泉寺城跡(城主高尾越前守)ではないかと推定される。当地は江戸後期の刀匠驍邦(福山住)の出身地で、彼はのち地名をとって中平姓を名乗っている。

有木村 ⑨豊松村有木

下豊松村・中平村・笹尾村の東に位置、東は備中国川上郡(現岡山県)に接する。それぞれ一連の高原および河谷で通じているが、北は成羽川の峡谷で小野(現油木町)と隔てられる。谷が深いため小野とは古くより交流はなかったと考えられる。

地名の由来について「西備名区」は、吉備津宮(現芦品郡新市町)の別当(祠官)有鬼(有木)氏が備中より来住し、旧称中山を有鬼(有木)に改めた、あるいは当地は古来吉備津宮の神領であったため宮内(現新市町)に住む有木氏の支配下に置かれ、有木に改称されたという。また備中下道郡山田(現岡山県総社市)の鬼身城に有鬼冠者という強者がいたが、吉備津彦命の将巨智磨呂命が征伐、巨智磨呂は有鬼の姓を授けられ吉備津宮の神主棟梁となったが(備中府志)、巨智磨呂の居館が備後・備中国境の日野山(六六九メ

ートル)にあったといい、その山麓である当地を有鬼(有木)とよぶようになったとも伝える。旧称中山は、日野山を備前・備中の境にある吉備の中山になぞらえてここでも吉備の中山と称し、同じく細谷川が流れることから、当地を中山と称したと伝える。当地と有木氏の関係は深いが地名と氏姓のいずれが先かは決しがたい。なお日野山は山容秀麗で自然崇拝の対象としての霊山の趣をもっており、あるいは古代は狼火山であり、そのため日野山とよばれるようになったとも考えられる。

地名有木は「福山志料」の「吉備津彦神社」の項に載せる永仁五年(一二九七)四月晦日付の鎌倉幕府の安堵状に「有木郷」とみえ、これによれば吉備津宮の神領であった。下って戦国時代、大内・毛利対尼子の勢力争いの接触点となった当地は支配者がめまぐるしく変転したと推測されるが、年月日不詳毛利元就書状(「譜録」所収渡辺三郎左衛門家文書)によれば一時期、毛利氏の配下渡辺越中守出雲守が領していたようである。近世、有木村は元和五年(一六一九)の備後国知行帳に高九〇〇石余とあり、元禄年間まで一村であったが(元禄一三年備前検地帳)、天保郷帳では東有木村(高五七八石余)・西有木村(三五一石余)の二村となる。分村の時期は不明。福山藩水野氏断絶後幕府領、嘉永六年(一八五三)二村ともに福山藩領に復帰。

東有木村は有木の東南部、日野山の西麓を占め、中心集落を日野郷という。日野郷は古代からの郷名であるという説もあるが確証はない。また「備中府志」の川上郡平川村紫城の項の記述から、日野郷は中納言日野資朝の領地であり、そのために日野とよばれるようになったという説もなされるが推測の域を出ない。

西有木村は有木の西北部を占め、北流する仁吾川とそれに流入する小河川の谷々に集落が開ける。仁吾川沿いに平川(現岡山県川上郡備中町)へ通ずる街道が走り、沿道の仁吾が中心集落である。西有木の南端、仁吾川と街道を見下ろし、牧迫・油谷の谷を望む尾首の丘陵に有木氏の支城尾首城跡があり、その西麓には土居という地名が残る。また川と街道を挟んで同城跡に対向する丘陵端に、当時の尾首城主内藤中務大夫久親によって文亀元年(一五〇一)勧請された猪鼻八幡社が鎮座する。

東西の有木村は明治八年(一八七五)頃合併して再び有木村となった。

中山城跡 ⑲豊松村有木　日野郷

日野山の西麓にある。中世当地に勢力を有し、備後吉備津宮(現芦品郡新市町)の神職も兼ねた有木氏が居城した。城とよばれるが実態は居館に近い。土居形式で北と東に空堀をめぐらし、土居の跡もはっきりと残っている。

有木氏について「福山志料」は「吉備津祠官ノ長トナリ連綿繁昌シ三国分祭ノ時、シタカヒ来ル後、宮政信ニ従ヒ戦功アリテ神石ノ郡、豊松庄ノ内ヲ采食ス、今ノ有木村ナリ」と記す。これによれば南北朝初期から当地と有木氏の関係が生じたようである。有木氏には鎌倉末期、俊弘とその甥頼弘が出、南朝方の桜山慈俊に呼応して各地を転戦、慈俊の没落後も勢力・所領を保持し戦国末期まで在地領主・吉備津宮神職として存続した。その間、文和年中(一三五二―五六)には大覚を開山として長音寺を開基(元禄年中備中川上郡平川村へ移転)、明応二年(一四九三)有木八幡を勧請、永禄年中(一五五八―七〇)宝全寺(曹洞宗)を開基するなどの事跡を当地に残している。

笹尾村　㊐豊松村笹尾

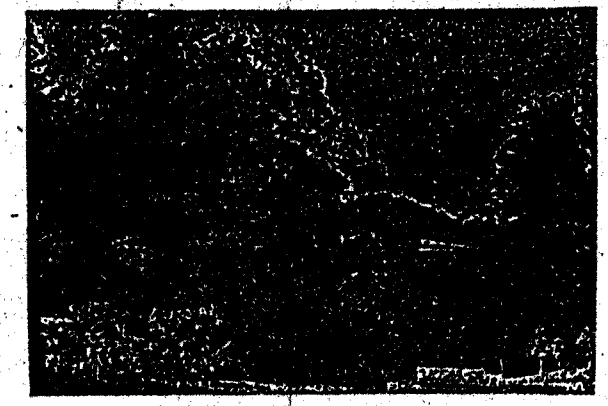
中平村・有木村の西に位置し、西は貝原川（天田川）を挟んで油木の宗兼・出佐・竹川内（現油木町）に接し、北は成羽川の谷を境に小野（現油木町）に対する。元和五年（一六一九）の備後国知行帳には「篠尾村」（高三六六石余）とみえ、「寛文朱印留」でも篠尾と記されるが、元禄一三年（一七〇〇）の備前検地頃から笹尾と記されることが多くなった。この時の検地で六〇一石余に増加。福山藩水野氏断絶後幕府領、嘉永六年（一八五三）福山藩領に復帰。

鎮守荒日山八幡社の創建は仁治二年（一二四一）、日蓮宗漫延山妙楽寺が大覚によって開かれたのが文和年間（一三五二―五六）と伝える。ただしそれ以前に真言宗の法隆山円乗寺があったと伝え、村内にあった高松山城・飯揑山城の城主として名を連ねる平川氏（本貫は備中国川上郡平川村）が備中・備後に入ってくるのが文和年間である点からみて、村の形が整うのは鎌倉末期頃と推定される。伝説は飯揑山城主として源頼光の名を伝え、さらに両城主として名を連ねる平群氏は吉備津彦命の将巨智磨呂の末裔と伝える。なお高松山城跡近くに平群という地名がある。平群氏は別に武内宿禰の子孫と伝える。

【孖山の古墳】　豊松村下豊松にありて品遍圖造の陵墓ならん。（地誌沿革參照）　坪井正五郎博士の考證されたるところ左の碑文に依りて知らる。碑は未だ建設に至らず。

孖山東方古墳の記

備後國神石郡豊松村大字下豊松に東西に並べる二小丘あり、等しく隋圓形にして南北に延長せり、東丘は周回百十間丘上北部に天神社あり、西丘は周回百五十八間丘上北部に八幡社あり、二丘を總稱して孖山といふ。古來天神社の後方には古墳ありと云ひ傳へしが明治三十年村民偶々其所を堀りて石室を發見し且つ其の内に於いて曲玉管玉切籠玉銀環祝部土器等を得たり。余此報に接し往々之を見る。丘の隋圓形を呈せるは其の頭を南にせる瓢形の墳塚なり。石室は正しく東面の石槨にして遺物は明に副葬品なり。余は又石室内に鹿の幽兒の頭骨及少くも二人の骨骼の存せしを認めたり。思ふに高貴の人と殉死者とを合葬して、之に略贄を供へたるものならん。副葬品中武器の絶無なるは此所に埋葬されたるものゝ女なるを肯ぐるが如し。更に多くの考證資料を得るに非ずんば人名を探るに由なしと雖、其の年代は塚の構造と遺物の種類とによりて略紀元五六百年頃なるべきを知る。八幡社の存する小丘も疑ふべからざる古墳なり。是或は前述ぶる女子の夫なるものを葬りたる所ならんか、孖山とは二墳の並べるを指せしか、各墳の二郡より成れるを指せしか何れとするも形容の稱たり。敢て聞子に關するにあらず。余が推測にして誤りなからんか二墳は寧ろ夫婦塚と呼ぶべきなり。遺跡に就て確說を立つるは固より容易の業にあらず、余は只孖山は二千年前の築造に係る古墳にして、東方に位せるものは恐らく貴婦人の葬所ならんと考ふるのみ。今や地方有志の士建碑の擧ありと聞き思ふ所を略記して送る事斯の如し。



孖子山

明治三十二年五月

東京帝國大學理科大學教授　理學博士　坪井正五郎識

別紙の文は１９８２年の平凡社刊行の広島県の地名からの引用ですが、豊松の地名を考える場合、班田制が崩れ、田堵による請作に始まる名田系の地名であろう。松の字のつく名田は庄園文書にも多くでている、また笹尾（ささお）も山内家文書などに（ささお名）などがある事などからみて名田系の地名とみてよいと思われる。政末などの地名も残っている　集落ごとに小地名を検討すればもっと多くの名田名がでると思う。

（　新庄山城に名を残している者）

内藤左馬允影政　仝豊後守　仝河内守実豊　仝新左衛門

上山壹岐守員　仝豊後守　片山八郎　（神石郡誌）

西備名区には左馬亮景敷　上村壱岐守とある　古城墨砦主記には次の名を伝えている、内藤左馬允　仝左近進　仝新右衛門　仝左馬介　仝河内守　このうち新右衛門は大内輝弘防州エ打入シ時毛利家ヨリ峰城守御トシテ篭城ス、とある　また河内守は元亀元年三月雲州三笠城ニテ恩田与市左衛門ヲ討取ルとある

（上村氏について）

神石郡誌に上豊松貞比山城に上村長門員時、左馬允の居とあるが、新庄山の項に上山壱岐守員貞がみえる

この上山は西備名区では上村にな　ている上村の一族の名が新城山と貞比山に別々に伝承されたものと思われる。上村氏については次のような文書がある（広島県史古代中世資料）

毛利元就書状

追而申候豊松之事、上村任存分候、有木事如承候四郎次郎方申談、久代内通之儀候哉、只今之姿可然存候、殊上古事　無別状有馳走之由申越候条尚以可然存候自然之時ハ於此方心底者御存知之分能　可被仰遣候為御心得候　かしく－－－－

もと就

渡　越

渡　出

まいる

上の文書によると上村氏が豊松へ入る事は当時の情勢としてはかなり重要な意味を持つものと思われる、上村氏についてはよく分からない点が多い、姓氏家系大辞典では（植村）が主流であるとでているが上村とも出ているその系統で当地方に結びつく者は見当らない、（かみむら）系に清和源氏小笠原の一派に石見の上村があり、明徳記に赤松配下上村氏とある程度である　萩藩閥閲録で神村氏と言うのがあるがこれによると　私先祖藤原氏之末流斎院ノ次官親能頼朝公之臣、駿州富士近辺於吉原弐百貫領知仕以在名、吉原ト申候其後備後国神村ニ　居以在名称号ヲ改申候、とあるが備後では世羅郡の吉原の系統とみられている　こうした上村氏について地元の研究者、井平軍治さんが新しいヒントをあたえて下さ　たので紹介しておきます、

上村家は備後の名族、宮氏の姿を変えた存在であるということである現在岡山県成羽町立病院長、上村家門氏は豊松上村家の子孫で豊松をおちて備中に来住したという伝承と家系を伝えている。それによると尼子毛利のはざまで悲運をみた宮の一子を志摩里馬屋原氏が養育しその本城、有井城のあった地名〝上村〟（現三和町）を号したというのである。その系図がしたのようになっぐている

宮大和守

三上因幡守

上村左衛門佐智盛－弥右衛門氏智－弥兵衛政氏－－－－

この系図からみると久代宮氏の系統のように思われます、若しそうだとすれば前出の元就の書状の文意も分かり易くなります。然し次の内藤氏の項で見る如く豊松へは既に南北朝期に宮氏の一族がはいっておりその関係で内藤氏が桜山挙兵にくみしたとしたら上村氏を久代宮系とみるのはどうだろうか、いずれにしても備後一円に勢いをはった宮氏であるから何かの形で残ったことは想像される。

（豊松と内藤氏）

豊松に残る山城で内藤氏の在城をつたえるものは新庄山城の他に次のようなものがある、豊松山城　内藤左馬進以下八名、いずれも永禄、天正の頃没落、別所城（恩ガ丸城）内藤左馬允　新左衛門　実盛以下数名の名ヲ伝えている。

内藤氏は〝天下大姓の一にして全国到る処にあれど殆ど藤原姓と称す〟と家系大辞典にあり全国各地に諸流派がある。美作　備中　伯　出雲　安芸　防長それぞれにぶ内藤氏の項があるのに備後にはない、太平記で有名な桜山慈俊の挙兵（１３３１）のとき神石軍の土豪、地侍の中心となって活躍した内藤実豊も伝説のうえでは美化されているがどの流派かは不明である。鎌倉時代に郷地頭として入部し戦国期まで命脈を保つた地侍であろうが毛利家中における多くの内藤氏連なる系譜は考えられない（閥閲録）備中の豪族でいちじ豊松をも支配した平川氏の由緒書のなかに　今度於椋山法成寺兵部大夫雑意仕候処龍護相届申致御供無相違罷退候、忠節神妙候弥可抽忠功者也

天文十（年欠カ）二月廿四日　　実信

内藤新右衛門　殿

（付戔）内藤宗治後新右衛門　高益ト改、備後豊松住、平川内蔵介親豊舞也

平川家との関係を見ることができるが平川氏が備中へ来るのは建武三年（１３３６）なので内藤氏はそれ以前に入部している。

鎌倉末期に宮氏の一族が豊松へ入っていたものと思われる史料に次のものがある。

長井蔵人丞時里目安状案

長井蔵人丞時里謹言上、備後国田総庄之事、右彼在所不知行仕次第者曾祖父縫殿助（重継）之時於龍野（播磨）御判始之時依遅参申依為宮豊松内縁契約不罷上以前号扶持仕、田総、石成、長和三ケ所申給、御判彼在所□豊松預申者也、其後内縁違変、彼御教書申掠三ケ所押領仕　其後錦小路殿（直義）之御時致訴訟之処、依有理運被下御判安堵仕者也－（略）其後於内野（山城）御合戦致忠節雖被疵　、此割（刻カ）豊松重而申掠－（略）

此の目安状からみると田総以下は長井氏が確保しているが宮氏の一族が豊松にいたことは伺える。こうした関係で桜山挙兵に当って神石郡の武士の多くが参加したものと思われる。

神石郡の武士で挙兵に参加したものは、江草右京亮忠安（上野村八頭山城）　内藤刑部左衛門清実（亀石村大寄山城）有木中務丞頼弘（有木村中山城）高尾九郎次郎元行（高光村馬場城）高尾小十郎元広（福永村高尾城）椙原筑前守高平（父木野村御殿山城）村田左衛門兼光（新免木路田城）仝左衛門三郎兼行（仝）永野兵部大夫忠義（永野二子山城）馬屋原四郎兵衛尉成宗（上村梨迫城）馬屋原備前守忠宗（上村有井城）などで有る。（これは余談であるが当時油木地方にいたと思われる矢田貝氏がどちらにも名をだしていないのは疑問のひとつである）いずれにしても豊松村の中心にあって戦国期まで続いた内藤氏も毛利氏の進出で、移住、帰農して近世農村の中で新しい生きかたを求めていったといえよう。

（内藤氏関係の諸城の位置と役割）

関係諸城の中で最も大きくて堅固な新城山は古城といわれる小規模な郭群と新城と云われる大規模な郭群があり、長年にわたって本城であった、集落の中心に土居を構え鎮守のある北東部の平地に豊松山城をおき、更に東のはしに別所城（恩ガ丸、東山）を置いている。この城はなまえが示すように東の守りのための出城である、この城の東北に西山と言う山があるこの位置関係からこの城の東の谷あたりが内藤氏（馬屋原＝毛利）と他野勢力（おそらく平川氏）の境であったのではなかろうか。

この城は別図に示す様に館城の模型のような、まとまった城である。

土居の北にある貞比山城も含めて、新城山－貞比山－豊松山城－別所城と狼煙、太鼓、笛でつなぎのとれる関係にあったものと思われる。

（豊松山城については再考の余地があるとの説もあるが郡誌によって、一応ここへいれておく）

八ケ社神代神楽

広島県指定　重要無形民俗文化財

猿田彦の舞

八ケ社神代神楽は、承徳2年（1098）八ケ庄（豊松、日野、日谷、笹尾、油木、忠原、花済、備中田手（後の三原））の社家によって結成され、最初は独特の吉備神楽に出雲系のものを取り入れ、八ケ庄、総鎮守である豊松鶴岡八幡神社の祭礼に、神前においておごそかに舞っていたものである。

後、文化年中（1804）備中国、三名の国学者、西林国橋のつくった備中神代神楽の一部をとり入れ、更に天保10年（1839）時の勅許、大宮司である、翁長門守尊章によって宮中神楽、並びに伊勢神宮の一部をとり入れて名実共に完成したものである。

●八ケ社神代神楽の特色

八ケ社神代神楽は主流である吉備神楽に（吉備津の能）を、出雲神楽に（紙園の能）を残して、太鼓、しめ太鼓、笛、手拍子を用いる急調子となっている。

（曲舞）（勧請舞）等、比較的緩調子な曲には、宮中雅楽や七種舞などの舞いぶりがうかがわれる。

神舞は伊勢大神楽の笛の音調がうかがわれ、岩戸の能には備中神楽がうかがわれる。

曲　舞
（神楽の基本舞）

八ケ社神代神楽

勧請の舞

内　容

（イ）神　役（前半の舞）

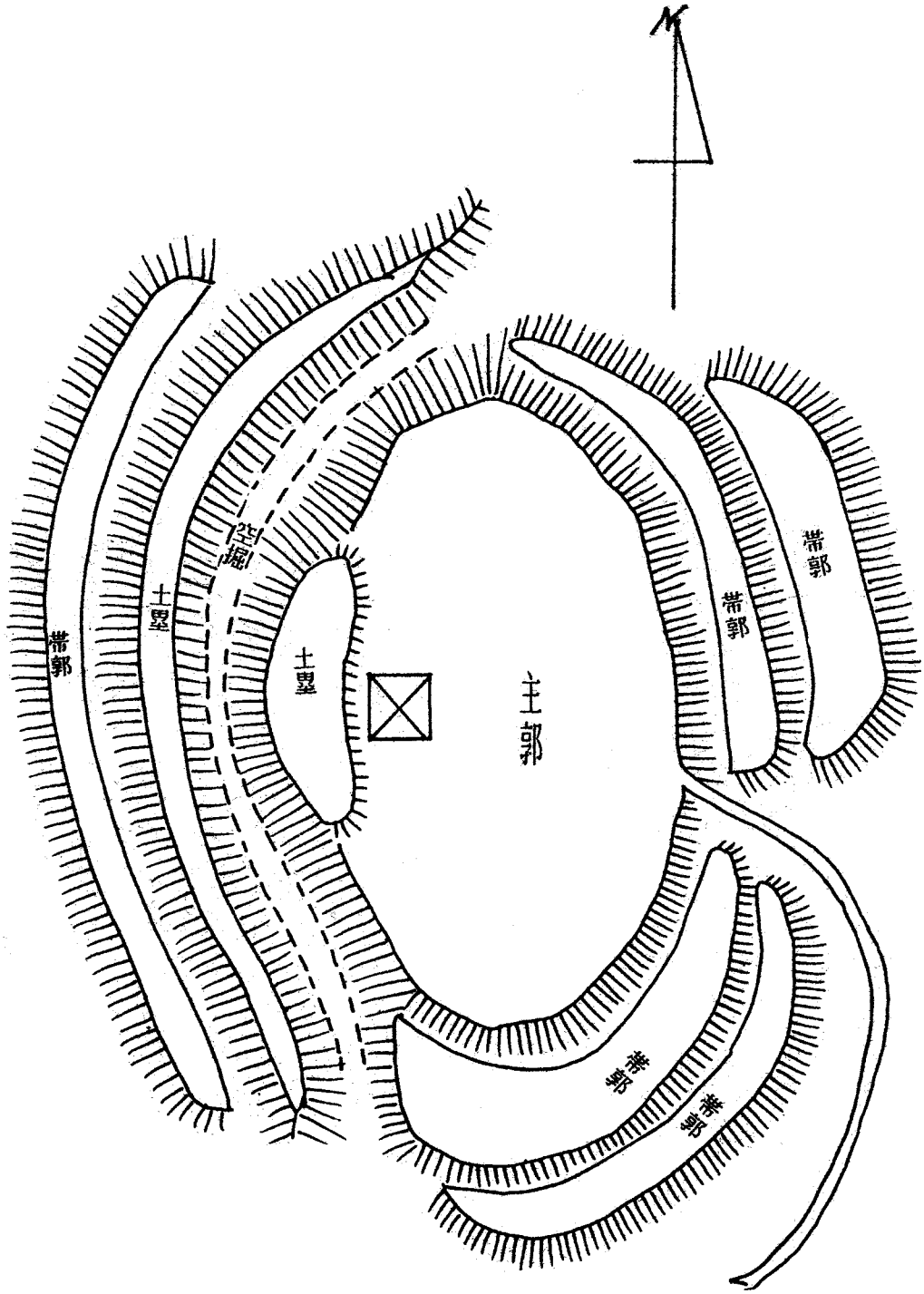
1．曲　舞（1人又は2人舞）
2．勧請舞（2人舞）
3．ごぎ舞（1人舞）
4．神　舞（2人舞）
5．指紙舞（2人舞）
6．神迎え（4人舞）
7．白間の神遊び

（ロ）神　能（後半の舞）

1．猿田彦命悪魔祓い
2．大社の能（国ゆづり）
3．紙園の能
4．龍宮の能
5．吉備津の能（細谷川）
6．八幡の能
7．岩戸の能

神迎えの舞

新成羽川貯水池
備中町
油屋
地王山城
高松城
玉泉寺城
尾首城
土居
平部
飯窪山城
豊松村
中平
西ノ丸
平佐
幸運仙
別所城
豊松山城
中山城
堂面洞窟遺跡
貞比山城
土居城
新庄山城



恩ヶ丸城跡平面図

0 5 10 50M

有木
改道
平郡
寺郡
豊松村
日南
中平
険地
東郷
南郷
野呂川
上
平佐
徳永寺
下豊松
坂根
津坂
川東前
中留
四月市
寺谷
平谷
道谷
矢原
井郷
上豊松
光明
内山
堀
矢上
黒岩